

【タイトル】逃げたってどうせ、拝啓、厨二の君へ

【作者】原作：小野駿・竹岡英大 作：梅光学院中学校・高等学校演劇部

2022年度作品 第60回中国地区高等学校演劇大会 創作脚本賞

【作品介绍】

ここは「開かずの工芸室」と呼ばれる、立ち入り禁止の教室。

昼休みになると、そこから、怪しい声が響くという。

高校一年生の太田ユイは、こっそりお弁当を食べる場所を探してその「開かずの工芸室」に入る。そこで、同じく、お弁当を食べようとしている高3の植村リョウタと出会う。

1

漆黒の弁当。ホーリーライトニング。繰り返される唐揚げ。二人の世界が、少しだけ、動き始める。

【登場人物の数】 8名

【上演許可を得るための連絡先】

梅光学院中学校・高等学校

梅光学院中学校・高等学校

〒750-0019

山口県下関市丸山町二丁目9番1号

電話：083-227-1200

FAX：083-231-6835

逃げたってどうせく拝啓、厨二の君へ

【登場人物】

植村リョウタ
植村リンカ
太田ユイ
太田コウヘイ
植村アツコ
古賀先生
ミサキ
メグロ

音楽と共に、物語は始まる。

【世界が、展開する①】

① はじまり 新学期のある日

使われていない旧校舎の工芸室。

ぼつんと、置いてある机の上に布に包まれた包みがひとつ置いてある。

怪しく登場する男女2人。二人とも制服を着ていて、高校生のようである。

男子の方は片目に眼帯。

リョウタ 来た。今日もついに来たっ。

リンカ この時を待ちわびていた。

リョウタ ああ、待ち遠しい、待ち遠しすぎて俺の、俺の邪眼がうずく。この眼帯で封印している俺の能力を刺激し、発動させようとするとは、恐るべし。そして戦うに十分な……
(リンカが弁当の包みをあげようと手をだすので) あああ！待った！それは俺の仕事だ！！

リンカ ならば、早くなさいませ、お兄様。

リョウタ わかっている。いくぞ！

リンカ はいっ！

リョウタ、無駄な気合をいれながら包みをあける。中には弁当箱

リョウタ (エネルギーを使いすぎた)ふう・・・

リンカ 大丈夫ですか、お兄様。

リョウタ このくらいのこと、なんでもない。では、いくぞ。

リンカ はいっ！

リョウタ、弁当箱の蓋をあける。

2人 おおおおおおおっ！

リョウタ 今日はまた一段と

2人 禍々しい！

リョウタ ああああ、素晴らしい！心地よいほど禍々しいではないか！

リンカ ここにだしまき卵が！

リョウタ 幾十に重なりしモンスターよ、今日もそなたは美しい

リンカ 炊き込みご飯っ！

リョウタ 大地に恵まれしデンプンどもよ。俺の中で存分に光り輝くが良い！

リンカ なんと、きんぴらごぼうに！

リョウタ 幾度となく刻まれし朽ちた剣よ！今こそ、我が元へ来たれ！

リンカ ななっ！ミニトマト！

リョウタ リコピン！！

リンカ ああ！なんと唐揚げがっ！

リョウタ 黄金の鎧をまといし囚われの身よ。我の中で煮えたぎり「カロリー」となれっ！

リンカ お兄様、どうか私にお恵みを！！

リョウタ たしかに、貴様の好物であったな。

リンカ お兄様！愉悅にひたっている暇はない。急がないとすぐに呪いの鐘が鳴ってしまっ！

まう！

リョウタ そうだ、そうだな。よし、行くぞ！妹よ！（両者舞台の端へ）うおおおおお

ー！！（走りながら真ん中で2人で手を合わす）いだだぎああすっ！！！！（キメポーズ）

リョウタ、テンション高く弁当を食べようと、どこから椅子をもってきて座り、箸箱から箸を出そうとして、箸を落としてしまっ！

2人 うああああああ

リョウタ なんとということだ！俺の力が・・・邪神が、邪神が近づいてきているというのか。

リンカ お兄様、大丈夫です。聖なる水で浄化すれば、それよりも呪いの鐘が。

リョウタ わかった、すぐに浄化の儀式を行おう。

リンカ お兄様、ご武運を。

リョウタ まかせろ・・・（ポーズを決めて）俺は、死なない。

リョウタがリンカに背を向けて眼帯を取っている間に、リンカ、走って出ていく。
リョウタ、振り向いて、

リョウタ (ため息のように) ふう……

リョウタ、出ていく。

少し、間。

ユイが入ってくる。

部屋のさみしい様子に少し迷うが、座って、お弁当が入っているだろう包みをとります。

ユイ はあ……。

包みをあげようとしたとき……

リョウタが戻ってくる。

ユイ あ……

リョウタ あ……

驚いて、動けない、間。

ユイ ごめんなさいごめんなさいごめんなさいごめんなさい違います違います違います
うんです!!!!!!

慌ててよくわからないことを叫びながら、飛び出していく。

リョウタ ……あれ、一年の……(何かを拾い上げる。ユイが落としていったお弁当を
包んでいた布だ)……はっ!

何かを気配を感じたように声をあげると、ウエストミンスターチャイム。

リョウタ、眼帯をつける。リンカが声をかける。

リンカ お兄様！呪いの鐘がっ!

リョウタ 今日はこちらまでか……リンカ、気をつけろ、邪神はすぐそこまで迫っているぞ。

リンカ はい、お兄様。

リョウタ しかし、俺は……(ポーズを決めて)俺は負けない。

リンカ お兄様、カッコいい!

リョウタ はーっはっはっはっ！
2人 はーっはっはっはっ！

音楽

【世界が、展開する②】

②昼休みの教室

生徒が3人 ミサキとメグロ、そして、ユイ

メグロは、インスタライブ中。ミサキは、そのそばの椅子に座って、スマホを触っている。

メグロ はい、今日も見てくれてありがとう！今日も学校から生配信です！もちろん、バレルと、反省文です！でも、そんな関係ないよねー！先週の「アルプス一万尺 最速記録挑戦」職員トイレ」超盛り上がったね！それ・でえ！今度は、なんと、わが梅山高校の七不思議のひとつ、「開かずの工芸室」に潜入しちゃうと思ってる！す。なんと、あの工芸室といえば、職員室にも事務室にも鍵がない、もちろん、生徒は立ち入り厳禁の教室！なーのーで！・・・じゃーん！（金づちのようなものを出す）開かぬなら開けて見せようホトトギス。これでドアをこじあけて、中に潜入しちゃうかと思ってます！す！先生の目があるので、ゲリラ的にやっちゃいます。日時は未定ですので、毎日チェックしてくださいねー。じゃあねえ。

5

ミサキ あー、これ、美味しそう。(ユイに) 今度、行ってみようよ。

ユイ あー、いいねえ。

メグロ でもいいの？ユイって、ダイエットしてるでしょ。ずっと。

ミサキ 必要ないじゃん、もうそんなに痩せてるのに。入学してからずっとお昼抜いてんじゃない。いつもふらーっどどっかに行っちゃうし。

メグロ そうよそうよ、一緒にお昼たべてキャッキャウフフしてこそそのトモダチでしょ。

ミサキ 我々高校生の生活の中でも最も重要な役割を演じているといっても過言ではないお昼の時間を一緒に過ごせないなんて、悲しすぎるよ。

ユイ そんな大げさな。トモダチだよ。私たち、トモダチ。

メグロ 思いついた！今度のインスタライブ、「開かずの工芸室で、女子高生3人、豪華ランチタイム」とかどうかな。

ミサキ でもさあ、その開かずの工芸室、なんか変な噂があるの、知ってる？。

メグロ あー、聞いた聞いた。時々、人の声が聞こえるんだって、誰もいないはずなのに！

ミサキ 私、昼休みに限ってだけど、結構毎日って、聞いた。

ユイ そうなんだ・・・

ミサキ 怖くない？

ユイ ...うん、そうだね・・・

メグロ 余計に盛り上がるじゃん！あっ！ウーバーとか頼んじゃおうか。「果たして授業

中の学校にウーバーは来てくれるのか」とかさあ・・・
古賀先生 無理です！

古賀先生が現れる。

3人 げっ！

古賀先生 学校にウーバーは、無理です。

急いでスマホを隠すミサキ、メグロのスマホは自撮り棒がついているのでもたついてしま
う。

古賀先生 メグロさん、今度やったらスマホ没収だって言ったわよね。(メグロに迫る)

メグロ あははは・・・(あらぬ方を指さして) あっ！

古賀先生 (思わずその方向を見て) え？

メグロ、その隙に走って逃げる。

古賀先生 私としたことが、こんな超古典的な手に・・・こら！待ちなさい！メグロさん！

メグロを追いかけて走っていく古賀先生。

ミサキ あー、逃げ切れないな、あれは。

ユイ 助けなくていいかな。

ミサキ いいんじゃない？とことん逃げるか、あきらめるかは自己責任だし。

ユイ 逃げるのをやめるのは、あきらめることなのかな。

ミサキ そんな難しい事わかんない。「逃げるのはよくない」とか「逃げてもいいんだ
よー」とか大人は色々言うけどさ、本当はどうなんだろうねー！

ユイ うん。

ミサキ 先生がこっちにまでキレてくるとウザイから、私たちも逃げよう。

ユイ うん・・・

ミサキ いざ、逃走！

ユイの手をひっぱって、ミサキ、去る。

音楽

【世界が、展開する③】※リョウタの家とユイの家も

「展開」がいったん落ち着いたら、舞台上に リンカ。

リンカ　今から2年前。私が中学校2年生の時、私は病気にかかった。特效薬もなく、治りにくい、重い病気。その頃の愛読書は「バイバイ神様」とか「漆黒の御剣(みつるぎ)」とか。兄はよく私につきあってくれて、その結果、邪眼を発動させた。兄の目と、私の両手に宿るフェニックスポジションは、時に邪悪な闇をひきよせた。私たちは思っていた。私たちはトクベツなのだから、つらい事や、苦しい事や、理不尽な事がふりかかって、それは当然なのだ。私たちはトクベツなのだから、目立たず、波風たてず、静かに、こっそりと生きていかなくてはならないのだと。中学校2年生。中二の・・・厨二の頃から、私たちはずっと、何も変わらない。

リンカ、ユイが入ってくる方向を見る。

③数日後　同じ部屋

すぐに、ユイが入ってくる。

大事に抱えていたカバンを置いて、部屋の中をなにやら探し始める。人が入ってくる気配を感じて慌てるが、慌てるだけで何もできない。

リョウタが入ってくる。手には弁当。

リョウタ　あ・・・

ユイ　あ・・・

ユイ、びっくりしてまた逃げ出そうとする。

リョウタ　ちょっとまって、逃げないで。

ユイ　(警戒している)

リョウタ　怪しいものじゃないから。怪しくないから、僕は・・・(ユイに近づこうとする)

ユイ　(逃げようとする)

リョウタ　だから、まって！

リョウタ　ユイを行かせまいとして思わず立ちふさがるが

ユイが勢いよくリョウタをつきとばす。

こけるリョウタ。弁当が転がる。

ユイ　あ・・・あの、ごめんなさいごめんなさいごめんなさいごめんなさい！

リョウタ　あ、いや、大丈夫だから。

ユイ　でも、だって、あの、お弁当が、お昼が、食べられないと、えっと、ええっと・・・

リョウタ　本当に大丈夫だから。

ユイ、あわてて、自分のカバンの中から自分の弁当を差し出して

ユイ　　これ！これどうぞっ！

逃げ出すユイ。

リョウタ　なんだ、あれ・・・（ユイが押し付けて行った弁当を見て）これは・・・弁当・・・か・・・

眼帯をする。リンカが入ってくる。

リンカ　お兄様、大丈夫ですか。はっ！

リョウタ　どうした。

リンカ　その箱から尋常ではない邪気を感じます。お兄様、お気づきでないのですか。リョウタ　バカな。そんなはずはない。気づいておったわ。

リンカ　もしか、あの女！邪神の手先では！

リョウタ　いや、俺の邪眼が、それはないと告げている。

リンカ　ならば何故・・・

リョウタ　それは、これを開ければわかる・・・

リョウタ、もらった包みをあける。弁当である。

リンカ　これはっ・・・

リョウタ　うわ・・・

リンカ　これは・・・

リョウタ　漆・・・黒・・・

リンカ　黒い。これは、まるで、

2人　ブラックホール。

リョウタ　なんだか、引きずり込まれ・・・ウウアアツ・・・

リンカ　お兄さ・・・ウエっ・・・

リョウタ　早く封印の儀を！

リンカ　（蓋を閉める）これを人前で食べるのは、たしかに・・・ねえ？お兄様。

リョウタ　なんともコメントしがたい。

リンカ　（弁当を見ながら）しかし、なんとという重厚感、いや重量感。このブラックホール、どうしてくれようか？

リョウタ　・・・（ユイの去った方をなんとなく、見る）

リンカ　お兄様？

リョウタ　なんでも・・・ない。

母　（舞台のどこかの違う空間で）おかえり。

音楽

④ リョウタの家

母の声がすると、舞台のどこかがリョウタの家のリビングになる。椅子が3つ。

母（アツコ）がテーブルに座って待っている。

リョウタが帰ってくる。

母 （嬉しそうに）お帰り！ごはんにしましょうね。ごはんごはん……（ご飯の歌をロずさむ♪）

テーブルを拭いたり、お茶碗を出したり、楽しそうに食事の用意。食卓には3人分の食器が並ぶ。

リョウタ あれ、今日面談って、伝えてたよね？

母 うん。聞いてたけど？

リョウタ ……じゃあ先に食べててよかったのに。

母 何言ってるの。いつも言ってるじゃない。”家族揃って“

リョウタ ……食卓を囲む

母 そうじゃなきゃ、ダメなの。

リョウタ うん。

母 そうでしょう？

リョウタ うん……

母 そうなの。家族全員でね。

リョウタ うん。でもさ、

母 （少し不自然なくらい強く）そうでしょ？

リョウタ うん、一緒じゃないとね。

母 早く手を洗ってきて。

リョウタ うん……あ、これ。

弁当箱を出す。

母 はいはい。

リョウタ おいしかった。

母 よかった。

リョウタ あのさ……

母 ん？

リョウタ 明日はさ、友達と一緒に食堂で食べるから、弁当は……

母 （聞こえているはずなのだが）ん？

リョウタ ……いや、いい。

母 うん。
リョウタ うん。
母 お腹すいたでしょう。今日はリョウタの好きな唐揚げよ。はりきってたくさん作りすぎちゃったっ！

母、お弁当箱を台所へ持っていくために去る。
一人残されるリョウタ。独り言。

リョウタ 唐揚げはリンカの好物だよ。僕のじゃない……それに、今日は、じゃなくて、今日も、だよ。お母さん。

ユイ (舞台のどこかの違う空間で) ただいま。

⑤ ユイの家

ユイの音がすると、舞台のどこかがユイの家のリビングになる。
ユイは、ケーキの箱を持っている。
父がテーブルに突っ伏して眠っている。傍らには酒瓶。

ユイ ただいま……
父 あ？ああ……

父がいきなり起きて歩き出す。
ユイ、びくりとして、殴られまいとするかのように頭をかばう。
父、とろんとした目でユイを見て。

父 おう。

ユイ ただいま……(ケーキの箱を示して)お母さんの好きだったイチゴの。期間限定のやつが出てたから、お仏壇に供えようかなって思って。

父 そうか、お母さん、喜ぶな。

ユイ そうだね。

父 弁当。

ユイ え？

父 弁当、美味かったか？

ユイ あ……

父 お父さんの作った弁当、美味かったか？

ユイ うん。美味しかったよ。

父 そうか……そうか……ん(手を差し出す)

ユイ ん？

父 弁当箱、出せ。

ユイ　　いいよ、私が洗う。
父　　出せ。
ユイ　　うん。
父　　どうした。
ユイ　　いいよ、お父さん、疲れてるし、酔っぱらってるし。
父　　（強く）どうした。
ユイ　　・・・忘れてきちゃった・・・机の中に・・・
父　　忘れた！？
ユイ　　（殴られまいとして自分をかばう）ごめんなさいごめんなさい！
父　　お前は、本当になんもできねえなあ、
ユイ　　明日は、明日は絶対持って帰って来るから。
父　　・・・本当に、ダメだな、お前は・・・ダメだ。

父、グラスから飲もうとして空っぽなのに気がついて、テーブルにそれをたたきつけるように置く。

ユイ　　ごめんなさい！もう、しないから。絶対忘れないから。
父　　（ユイに近づく）
ユイ　　ごめんなさい！
父　　（ユイの頭をなでる）
ユイ　　・・・

父、あくびをしてそのまま寝てしまう。

ユイ　　どうしよう・・・お弁当箱・・・

音楽

【世界が、展開する④】

⑥ 次の日 同じ部屋

リョウタが入ってくる。

リョウタも入ってきて、リョウタに眼帯をつける。

リョウタ　来た。今日もついに来たっ。

リンカ　この時を待ちわびていた。

リョウタ　ああ、待ち遠しい、待ち遠しすぎて俺の、俺の邪眼がうずく。（リンカが弁当の包みをあげようと手をだすので）あああ！待った！それは俺の仕事だ！

リンカ　ならば、早くなさいませ、お兄様。

リョウタ わかっている。いくぞ！
リンカ はいっ！

リョウタ、なんだかキレが悪い。

リンカ お兄様、どうかなさいましたか？
リョウタ なにがだ？

リンカ (急に口調とテンションが変わる) お兄ちゃん。

リョウタ (同じく雰囲気が変わる) なんだよ。

リンカ なーんか、テンション低いからさあ・・・お兄ちゃん、もしかして・・・
リョウタ もしかして、なんだ。

リンカ あの子のことがなんか気になってるでしょう。

リョウタ ああ・・・まあ、ね・・・

リンカ あれ、否定しないんだ。

リョウタ (慌てて) いや、変な意味じゃない。変な意味じゃないぞ。

リンカ 変な意味ってなに？

リョウタ 変な意味ってのは、それは、その、なんだ・・・

ユイ (緊張気味の声) 1年B組 太田ユイです。はいってもいいですかっ！？

ユイが入ってくる。

リョウタ、慌てて眼帯を取る。リンカ、去る。

ユイ やっぱり・・・いた。

リョウタ うん・・・

ユイ あの、先輩・・・ですよね・・・

リョウタ 植村。

ユイ はい。

リョウタ これ・・・(弁当箱を出す)

ユイ あ・・・

リョウタ 洗ってあるから。

ユイ 中、見ましたよね。私、バカみたい。あんなまずいものを人にあげるなんて

リョウタ 食べたよ。

ユイ え？食べたんですか？あれを？本当ですか？

リョウタ うん。

ユイ ええええ、まずかったでしょ。ごめんなさい、本当、ごめんなさいごめんなさいごめんなさい。

リョウタ いや、謝らなくてもいいって。

ユイ でも・・・

リョウタ いつもと、違うモノ食べられて、よかった。

ユイ ...はい・・・

リョウタ こっちこそごめん。あの日、お昼抜きになっちゃったでしょ。お母さんにお礼を……

ユイ お父さんです。

リョウタ え？

ユイ お弁当、作ってるの、お父さんなんです。料理ほんとヘタクソなのに、それでもがんばって毎日作ってくれるから、私もがんばって食べるんですけど。教室で食べるのは……ちょっと……

リョウタ ああ、それで。

ユイ 最初は、トイレとかに行ってたんですけど、女子トイレから異臭がするって……

リョウタ ああ、女子が騒いでた、アレ。

ユイ 犯人……私です。

リョウタ 言わないから。誰にも。

ユイ はい……ありがとうございます。

ユイ、出て行こうとする。

リョウタ お昼、食べないの？

ユイ でも、ここは……

リョウタ ここ、誰も来ないよ。鍵、無いから。

ユイ でも……

リョウタ うん、ちょっとドアノブをガチャガチャやると、開くんだな。よくわかったね。

ユイ 偶然です。

リョウタ まあ、いろいろあるよな、その辺で食べたらず僕は、いいから。

ユイ 先輩は、どうして……

リョウタ ……誰にも言わない？

ユイ あ、はい……

リョウタ 僕の邪眼からのエネルギーが鍵というこの世の物理的壁を排除したんだ。

ユイ ……はあ

リョウタ うん

ユイ ……ちょっと何言ってるかわからないです。

リョウタ まあ、そうだよな。

ユイ ごめんなさい。

リョウタ 僕は隅っこでいいから。

ユイ 先輩は……教室で食べないんですか？

少しためらってから、自分の弁当箱をユイに見せるリョウタ。

ユイ 美味しそう。唐揚げに、きんぴらに、ミニトマトに……

リョウタ 毎日、同じ。

ユイ え？

リョウタ まあ、色々あって、毎日、同じものだから、教室で食べてると、ちょっとね。

ユイ ああ。

リョウタ めんどくさいね。

ユイ ……めんどくさいですね。

リョウタ ということで、僕は、いいから。

ユイ ありがとうございます。

リョウタ うん。

二人、黙って、弁当を食べ始める。

(ユイは客席に背中を向けて、リョウタは客席を向いて離れた場所で)

舞台のどこかに、ユイの父

父 おはよう、今日も弁当、忘れずに持って行けよ。まあ、父さん、不器用だから、あんまり美味くないかもしれないけど、仕事に疲れて、ついつい酒に逃げちゃうけど、ユイの弁当だけは、毎朝作るって、母さんと、約束したからな。だから、朝だけは、酒は飲まない。シラフで、ちゃんと、作ってる。母さんは戻ってこないんだから、ユイのためにがんばらなくちゃな。あくまでも、ユイのために。ユイのために。持って行けよ。忘れるなよ。お前、本当にダメな奴だから、お父さん、心配なんだよ。だから、弁当、忘れるなよ。

14

父の姿、消える

舞台の別の場所にリョウタの母

母 今日特別に唐揚げ、3個増量しておいたからね。本当、あんたは唐揚げが好きなんだから。それだけじゃないわよ。卵焼きもきんぴらもプチトマトも、好きな物ぜんぶいれておいたからね、お昼、楽しみにしておいてね。沢山食べてね。お母さん、空っぽのお弁当箱が帰って来るのがとっても嬉しいの。ああ、今日も元気で健康で一日すごしてくれたんだなあ、って嬉しくなるの。だから、残さず、食べてね。

母の姿、消える

リンカが出てくる

リンカ お兄様、大丈夫か？はっ、もしかして、闇の使者がお兄様の魔力を……

リンカの言葉が聞こえないのか、リョウタは黙々と食べている。

そんな兄を複雑な表情で見つめるリンカ。

音楽

⑦ 「逃げる」は恥なのか？役に立つのか？

以下は、「世界が展開している」間に繰り広げられる。
メグロが逃げてくる。その後を追う古賀。

古賀先生 待ちなさい！今日こそはスマホを没収します！

メグロ 嫌ですっ！

古賀先生 逃げて同じよ。あきらめなさい！

メグロ だから嫌ですっ！

追いかけてこの2人

ミサキとユイがやってくる。

ミサキ もうあきらめなさい！逃げきれないわよ！

メグロ ……(立ち止まる)

ミサキ あ、あきらめた。

メグロ あきらめない。

3人 え？

メグロ 「逃げる」の反対は、「あきらめる」じゃない気がする！

ミサキ よくわからないんだけど。

メグロ わたしにもよくわからない！

結局逃げ出すメグロ、古賀先生をつきとばす。先生のメガネが飛ぶ。

ユイ 先生！大丈夫ですか！？

ミサキ センセイ、メガネ……

メガネ無しでゆっくりと立ち上がる先生。

邪悪な照明と音楽

古賀先生 にーげーたーわーねー

ミサキ 先生???

ユイ 先生、あの、メガネ……(センセイに渡す)

古賀先生 (メガネをかけて深呼吸) ありがとう。

いつもの古賀先生である。

古賀先生 これ以上逃げると反省文プラス校庭の草抜きよっ！

古賀先生、走っていく。
その後を追うミサキとユイ。

「世界の展開」が終わると、そこは例の工芸室。

⑧ ユイとリョウタ

いや、いつもの工芸室だが、少し照明が違う。音楽もなんか雰囲気が違う

ユイが、工芸教室にやってくる

リョウタはいない

ユイ 椅子に座り、カッターを取り出し、腕を切ろうとする
と、突然ドアが開きリョウタが入ってくる

リョウタ えっ！何してるの！？

リョウタ、素早くユイの手を止めるが、カッターが腕にあたり少し切れる

リョウタ いてて・・・

ユイ あっ、ごめんなさいごめんなさいごめんなさい！

リョウタ あーいや、少し切れただけだから大丈夫だよ。それより・・・

ユイ (遮るように) ちょっと待っててください、私絆創膏持ってるので！

ユイ、カバンから絆創膏を取り出し、リョウタの腕に貼る

リョウタ ごめんね。

ユイ いえ、こちらこそすみません！先輩を怪我させちゃって。

リョウタ・・・何やってたんだよ。こんなところで。

ユイ 先輩知りませんか？リスカ。

リョウタ リスカットは知ってるけど・・・なんで。

ユイ ー

リョウタ いや、話したくないなら別にいいけど

ユイ ちょっとヘビーですけど、いいですか。

リョウタ いや、別にいいよ、話したくないなら

ユイ 話したくないわけじゃないですけど、先輩が聞きたくないなら。

リョウタ・・・ごめん。

ユイ なにがですか？

リョウタ 止めちゃったの、悪かったなって。どんなバカなことでもさ、その時にはどう

しても必要だっと思うからやるわけじゃない。だから、どんな理由かは知らないけど、やりたかったんでしょ、今日、それで、やりたかったこと、止めちゃって。ごめん。

ユイ 先輩に止められなくても、どうせ勇気出なくてできなかったかもですから。別にいいです。

リョウタ ごめん。

ユイ ……それに、先輩が説教とか押し付ける人じゃなくて、よかったです。

沈黙

ユイ 先輩は、ここによく来るんですか？

リョウタ ああ、まあね。

ユイ どうしてですか？

リョウタ ん？ああいやこれはそのあのーそうだな、えっとー…

ユイ 隠しておきたいことだったら無理に言わなくても大丈夫、ですよ。

リョウタ まあ、そういうことだな。

ユイ はい。いるじゃないですか、自分が言いたくないようなことをしつこく聞いてきて言わせようとしてくる人。

リョウタ それは、僕も苦手かな。

ユイ やっぱりそうですね。クラスでもいるんです、私がなんでお弁当の時だけ教室からいなくなるのか、ってしつこく聞いてくる人。

リョウタ うちにもいるよ。一年のときにね、同じ弁当ばかり食べてることをしつこく聞かれて、黙つてるとすごい怒られたんだ。だから一年の二学期から僕はここで。

ユイ だからいいですよ。詳しく話さなくても。

リョウタ うん。なんで人ってあんなにも他人に干渉したがるんだろうね。

ユイ わかります。なんでなんですかね。

リョウタ まあ僕らがここで考えたってしょうがないことなんだけどね

ユイ (考え込んで) 先輩、もしよかったら今度私がお弁当作ってきましようか!?

リョウタ え？

ユイ あ、いやその。心配してもらったお礼というか。なんというか。

リョウタ 気持ちはあるがたいけど、申し訳ないよ。

ユイ いえ！毎日同じお弁当だなんて、たまには違ったものでも食べないと、

リョウタ でもねえ。

ユイ じゃあ代わりに先輩のいつものお弁当食べさせてください！私いつもあんな弁当だから、たまには普通のお弁当を食べてみたくて！

リョウタ ……そっか。じゃあお願いしようかな。

ユイ わかりました！

リョウタ どうせ弁当は毎日だから作ってくれるのはいつでも大丈夫だよ。無理のない時間をお願い。

ユイ はい！任せてください。あ、でもお父さんが起きないように作らないといけなからあまりいいものじゃないかもしれませんが…

リョウタ うん、どんなものでもいいよ。僕は気にしないから。

ユイ ありがとうございます！・・・じゃ、また。

リョウタ また。

ユイ、勢いよく出ていく

ちよっと変なウエストミンスターチャイム

照明が変わり、音楽が消える。

リョウタ あ・・・

リンカ、入ってきてリョウタに眼帯をつける

リンカ お兄さま、お兄さま、おにいさまー！

リョウタ はっ！

リンカ なにを一人でたにた笑っておられたのだ。

リョウタ いや、あの・・・弁当を・・・え？（リンカをはっきり認識して）うわあああ
あ！

リンカ ・・・・うわ！なにかからぬ妄想をしておったな。

リョウタ うん、いや、確かに、ぼーっと考え事を・・・そうだな、こんなに急に
互いが近くなるはずなはずがないよな

リンカ あの女の事を。

リョウタ なんか、心配だなあって、思ってた。

リンカ なんとなんと！あの女のことを考えて、なにやらいやらしい妄想をッー！

リョウタ ・・・・そんなもの・・・我がそのような事をするわけがないだろうが。破廉恥
なあんなこととかこんなこととか！

リンカ ・・・・やっぱりなにか破廉恥な、やらしいことを考えていらっしやいましたね

リョウタ いやらしくない！ただ、こんなことがあったらいいかなあ、とか、ちよっと思
ったのは、確かで・・・あの、その・・・

リンカ お兄さま、やはりあの女と会ってから変であるぞ。

リョウタ なぬっ！？へ、変！？この完璧な存在の我のどこが変だというのだ！

リンカ （口調が変わる）そんなふうに取り乱すところだよ、お兄ちゃん。

リョウタ ばっばかもの！そんなことはない！これはあれだ、あのー聖なる天使ガブリ
エルのホーリーブレスを食らってしまったんだ・・・

リンカ もう！そうやって逃げないの！

リョウタ 逃げてない！ただ・・・今のままでいいんだ。今のままでいいんだ。

本物のウエストミンスターチャイム

リョウタ、眼帯をはずす。リンカはいなくなる。

ユイが入ってくる。

ユイ こんにちは。

リョウタ ああ・・・

ユイ どうかしましたか？

リョウタ いや、なんでもない。なんでもない。

ユイ ・・・・早いですね。今、昼休み、始まったばかりですよ。

リョウタ 3年生は、今日は特別時間割だったから。

ユイ あ、じゃ、お昼、食べちゃいました？

リョウタ いや、まだ。

ユイ そうですね（なぜか少しうれしそう）

リョウタ ちょっとぼーっとしてたら、いつのまにか昼休みだった。

ユイ あー、ありますよね、そういうの。

リョウタ なので、弁当は、今から。

沈黙

リョウタ 食べようか。

ユイ はい。

二人、離れた場所でそれぞれの弁当をあける。

リョウタ あのさ・・・

ユイ はい。

リョウタ ・・・・死にたい、とか、思った事、ある？

ユイ ないです。

リョウタ こう、手首とか切っちゃいたいとか。

ユイ ないですよ。

リョウタ そうか・・・よかった。

ユイ きっと、このままでいたら、このまま静かに、平和に、過ごせるんです。だから、きっと、このままでいいんです。今のままで。

リョウタ ・・・・まあ、そうだな。

ユイ はい。

沈黙

ユイ あの

リョウタ はい。

ユイ あの、もしよかったら今度私がお弁当作ってきませうか。

リョウタ え？

ユイ あ、いやその。心配してもらったお礼というか。なんというか・・・
リョウタ ああ・・・うん。
ユイ 父さんが起きないように作らないといけないからあまりいいものじゃないかも
しれませんが・・・
リョウタ ・・・・じゃあ、僕も自分で弁当作ってみようかな。
ユイ ほんとうですか？
リョウタ ・・・・いや、でも・・・すぐには無理かもしれない・・・でも・・・
ユイ (もしかしたらすこしがっかりしたかもしれない) そうですね・・・
リョウタ ごめん
ユイ すぐには、無理ですよ、変わりませんね。
リョウタ うん・・・
ユイ 食べましょう。
2人 いただきます。

二人、食べ始める。

【世界が、展開する⑥】

⑧数日後 工芸室

ユイが明るい表情で座っている。手にはいつもと違う布につつまれた弁当箱。
誰かが入ってくる気配がしたので・・・

ユイ 先輩！あの、今日は・・・

古賀先生が入ってくる。

古賀先生 今日こそは逃がさないわよ！ちょっと乱暴に押せばドアは開くって、盲点だっ
たわ！出てきなさい！

ユイ 先生・・・

古賀先生 え？太田さん？

ユイ あ・・・あの・・・

古賀先生 メグロさん、見なかった？

ユイ ここには・・・いません。

古賀先生 本当？(あたりを探して)それで、あなたは、こんなところで、何やってるの？

ユイ あの・・・それは・・・

古賀先生 この教室は立ち入り禁止ですよ。

ユイ あ、はい、でも・・・

古賀先生 でもじゃないでしょ・・・お弁当？あなた、ここでお弁当食べるつもりだった

の？

ユイ　それは・・・

古賀　もう！あなたたち、何を考えてるの？学校のきまりを何だと思ってるの？

リョウタが入ってくる。

リョウタ　あ・・・

古賀先生　なに？植村君もここでなにか？

リョウタ　あ・・・いや・・・

古賀先生　言いなさい。え？まさか、使用禁止の教室でお弁当を？2人で？

リョウタ、ユイを見る。

古賀先生　説明しなさい！

リョウタ　・・・違います。

古賀先生　はあ？

リョウタ　（強く）違います！

古賀先生　何が違うの。

リョウタ　・・・たまたま、人の声が聞こえたから、どうしたのになって思っ

古賀先生　本当に？

リョウタ　その人、学年違いますよね・・・よく知らないけど。

ユイ　え・・・

古賀先生　そう、1年生の太田さん・・・知り合いじゃないの？

リョウタ　知りません。

ユイ　あ、でも・・・

リョウタ　知りませんが、全然。

古賀先生　うん。

リョウタ　クラスも学年も違う、女子とご飯するとか、ありえないです。

古賀先生　まあ、それはそうよね。

リョウタ　はい。

古賀先生　（ユイに）太田さん、ちょっといらっしやい。

ユイ　あ・・・

古賀先生　職員室で、話を聞きます。

ユイ　でも・・・

古賀先生　いいから、いらっしやい。

ユイ、古賀先生に連れていかれる。ユイ、リョウタにすがるような眼を向ける。

それを見ることができずに、背中を向けているリョウタ

リンカが出てきて、リョウタに眼帯をする

リンカ 邪神にさらわれたぞ、お兄様の、お友達が。

リョウタ トモダチとかじゃない。ただの・・・

リンカ ただの？

リョウタ とにかく、関係ない。

リンカ (渾身の軽蔑の音声) はあああああ？

リョウタ ……な、なんだ。

リンカ それでいいのですか？

リョウタ え？

リンカ その耳は飾りかっ！それでいいの、って聞いているのですよ。お兄様。

リョウタ いいも、悪いも、僕にはなにもできないから・・・

リンカ 見損なっただぞ。お兄様。私の失望は漆黒の闇に封じられたドラゴンの怒りよりも深いぞっ！

リョウタ 何キレてんだよ。

リンカ 今こそ、その眼帯で封印された力を解き放つ時ではないのですか？

リョウタ ……。(眼帯をさわる)

リンカ 今はさなくて、いつは必ずのかっつーの！(リョウタが何も言わないので) あー、そう。じゃ、はずすな。一生はずすな。一生フーインしてろ！中途半端なままで世界を見てろ！ばーかばーかばーか！

リョウタ 子どもかっ！

リンカ 違う、私は永遠の中学2年生だっ！・・・。(口調が変わる) お兄ちゃん。

リョウタ うるさい・・・

リンカ お兄ちゃんのおほ！へたれ！いくじなし！へっほこー！

リョウタ うるさい！

リンカ 面倒なことになりそうなことは全部スルーして。我慢して、何も言わないで、逃げて、逃げて逃げて。同じ、いつも同じ。今度の事も、お母さんのことも・・・私の事も。

リョウタ うるさい

リンカ 逃げてばかり。そんなの、かっこわるい！

リョウタ うるさいうるさいうるさいうるさいうるさいうるさいうるさいうるさいうるさい！

リョウタ、机の上の弁当に気が付く。カードが添えてある。

リンカ (読む) 『先輩へ。食べてください』

ユイが、自分のために作ってくれた弁当だ。

リョウタ、それを開けて、食べる。味わう。

リョウタ ……美味しい。

リョウタ、走り出す。

リンカ お兄ちゃん！
リョウタ (止まって、振り返って) リンカ、突風召喚だ！
リンカ え？
リョウタ その耳は飾りかっ！聞こえただろう？
リンカ (わざとらしく) えーっ 良く聞こえなかったアー
リョウタ (改めて恰好をつけて) 突風召喚だ！
リンカ そうこなくっちゃ！
リョウタ・リンカ (かっこよくポーズ) しっぷう、しょうかんっ！！

音楽。

【世界が、展開する⑦】

⑨職員室

古賀先生がユイと対面で座っている。なにか説教されている様子。

リョウタ 失礼します！3年Bクラスの植村リョウタです！古賀先生に用があつてきました！入ります！

古賀先生 なんなの？今先生はとりこんでるから後で・・・

リョウタ 太田さんを連れて逃げます！

古賀先生 はあ？

リョウタ 逃げますが、あきらめるわけじゃないです！

古賀先生 え？

リョウタ リンカ！

リンカ はい！お兄様！

リンカ、邪悪な波動に満ちた杖を持ってくる。

リョウタ 貴様との最後の決戦だ！

古賀先生 何言ってるの！植村くん！

リョウタ 今こそ貴様の真の姿を見せるが良い！

古賀先生 だから、さつきから何を！

リョウタ 正体を隠しても私の邪眼の前では無駄だ！(数冊のを取り出す)先生！先生は、いまだに厨二病をわずらってますねっ！先生の机の引き出しに隠してあった恥ずかしい書籍の数々！「ムー大陸はあった」「邪眼は語る」「アトランティスの謎」「転生したら神になつてしまった件」っ！

古賀先生 や・・・やめなさい

リョウタ きわめつけは「死海文書は知っている」っ！

リンカ 承知!

ユイ、倒れている古賀先生にメガネをかける

走るリヨウタとリンカとユイ

物陰に隠れて

ユイ さっきの、なんですか?

リヨウタ なにって?

ユイ よくわからない、邪眼とか、死海文書とか、インフィニティなんちゃらとか。

リヨウタ 昔、妹と「厨二病ごっこ」とかして、よく遊んだんだ。それで、つい。

ユイ なんか、別人みたいでした。

リヨウタ ほんと?

ユイ 先輩も、先生、も。

リヨウタ 太田さん、住所教えて。

ユイ は!?

リヨウタ いいから、教えて。

ユイ えっと・・・×××町の〇丁目3の55・・・

リヨウタ (スマホを出して、何やら打ち込んで) これでよし・・・と。

リンカ お兄様、邪神たちがすぐそこに・・・

リヨウタ 行こう!

ユイ どこへ?

リヨウタ 太田さんの家!

ユイ ええええええ?

スリリングな音楽。

【世界が、展開する⑧】

⑩ユイの家

父がやはり酒瓶を置いて眠っている。

そこにユイとリヨウタとリンカがどやどやと入ってくる

リヨウタ おじやますっ!

ユイ あの、ちよっと、ダメです!

父 あ・・・?

ユイ ダメ!お父さんお酒飲んでる時、キョーボーだから!

リンカ お兄様!ファイト!

リヨウタ あの、お父さん!お願いがあります!

父　　なんだ、誰だお前。

ユイ　　あの、学校の先輩……

リョウタ　話を聞いてください。大事な話なんです。お弁当の事で

父　　はあ？

リョウタ　大人にはわからないかもしれませんが、でも、学校っていう閉じた世界で暮らしてる僕たちには大事なアイテムなんです。お弁当。

父　　いや、だから……

リョウタ　あの、それで、ちよっと、もう少ししたら、もう一人来るので……（スマホを見て）遅いな……あの、それまで……（決意して）僕の一発芸二〇連発をもらってください！

リョウタ、一発芸二〇連発！

途中でピンポンとドアチャイム

リョウタ　来た！

リョウタ、玄関へ。ひっぱってきたのはなんとリョウタの母。

母　　ちよっと、なにがどうなってるの？

ユイ　　誰？

母　　すみません、おじやまします。

リョウタ　お父さん、うちの母です。

父　　だから、なんなんださつきから……

リョウタ　あの、お父さん、うちの母から料理を習ってくれませんか。

父　　は？

リョウタ　こう見えて、料理上手なんです、理由があって、今は唐揚げとか卵焼きとかしか作れないんですけど……

父　　だから……

リョウタ　（遮るように大声で）妹が死んじゃってから……

父　　は？

リョウタ　妹が死んじゃって、仕事で死に目にあえなかったのを後悔して、それで、妹はまだ生きてるって思いこもうとして、今は、毎日唐揚げばかりなんですけど、でも、きつと……

母　　何を言ってるの？他人さまにそんな……

リョウタ　前は、オムライスとかハンバーグとか、あ、和食も得意だったんです。

ユイ　　先輩、いいですか。

リョウタ　僕、唐揚げよりも、とんかつが好きで、お母さんのとんかつが好きで、だから、美味しいとんかつの揚げ方を習ってほしいんです。美味しいお弁当の作り方をならってほしいんです。

父　　何を余計な事を……

リンカ お兄様、ひるむな！逃げるな！

母 そうよ、いきなり何よ、こちらに失礼でしょう

リョウタ ユイさん、いつも一人なんです。お弁当は嬉しいけど、恥ずかしくて、友達と食べられないんです。いいんですか？それでいいんですか？

父 友達って・・・(ユイに) そうなのか。

リョウタ そうですよ、大人なら想像つくでしょうそのくらい。お父さん、お父さん、ユイさんが友達と一緒に笑って昼ご飯を食べられるように、お願いします。お願いします！ユイ いいの、私は今のままでいいの、お父さんが朝だけは、お酒我慢して作ってる、それだけで・・・

リョウタ 嘘つくなよ！今じゃないと言えないぞ！一生言えないぞ！

ユイ だって・・・

父 そうか・・・

リョウタ え？

父 話はわかった(リョウタ、喜ぶ)・・・が。

リョウタ お父さん。

父 俺はお前の「お父さん」じゃねえっ！

父、リョウタをこぶしで殴る。

音楽がスローモーションになる。

みんなの「リョウタ！」「先輩！」「お兄ちゃん！」の叫びもスローモーション。

その中、ユイが、父に向って、動く。動いて、手を振り上げる。

リョウタ (スローモーション) 美味しい、お弁当を・・・

音楽。

【世界が、展開する⑨】

「展開」がいったん落ち着いたら、舞台上に リンカ。

リンカ 今から2年前。私が中学校2年生の時、私は病気にかかった。特効薬もなく、治りにくい、重い病気。そして、私は・・・死んだ。

⑪リョウタの家

リョウタが寝かされている。

母がやってきて、リョウタのほほに冷たいタオルをあてる

リョウタ うわっ！！

飛び起きるリョウタ

母 冷やしておきなさい。明日、きつとすぐ腫れるわよ。

リョウタ ……どうやって……

母 あんたが殴られた後ね、あちらのお父さんを、娘さん？ユイさん？が殴って
リョウタ 太田さんが？お父さんを？

母 そうなのよ、それでね、お父さんが「ごめん、ごめん」って泣きだしちゃって、
なんかもう、カオスで。

リョウタ ……どうしても、そうしなきゃって思ったから。

母 古賀先生から連絡もらって、学校大パニックみたいよ。お母さん、呼びだしく
らってるから、後で行ってこなくっちゃ。

リョウタ やらかしちゃったなあ…。

母 ……ごめんね。

リョウタ なにが？

母 いろいろ

リョウタ ねえ、お母さん。

母 うん。

リョウタ リンカ、死んじゃったんだよ。

母 知ってる。

リョウタ あれから、2年たったんだよ。生きてれば…高！

母 うん。

リョウタ 同じ高校の制服を着てたかもしれない。

母 わかってる。

リョウタ 唐揚げは、リンカの大好物だったんだよ。僕のじゃなくて。

母 そうね

リョウタ 最期まで、食べたいなああって、お母さんの唐揚げ食べたいなあ、って病院のベ
ッドでぐずぐず言ってたんだよ。

母 覚えてる

リョウタ もう、居ないんだよ。リンカは。

母 知ってる。

リョウタ もう、居ないんだ。

母 うん…。

リョウタ やつと言えた。

母 うん…。

リョウタ 言わない方が、いいかもしれないって思ってたんだ、でも。

母 ありがとう。言葉にしてくれて。

リョウタ お母さん、今日は、とんかつ揚げてよ。僕の大好物。

母 そうね。

リョウタ 揚げてくれる？

母 いいわよ。

リョウタ それから、オムライスも作って。

母 そんなに食べられるの？
リョウタ 男子高校生の食欲なめないでよね。
母 ごめん。
リョウタ うん。
母 タオル、とりかえよっか。

母、奥へ。
リョウタ、起き上がる。

リンカ やつと言えた。
リョウタ 言えたなあ。
リンカ 口に出してみると、簡単だったね。
リョウタ うん。

リンカ よかったね。お兄ちゃん。
リョウタ よくないよ。明日学校に行くのが恐怖だ。

リンカ また逃げる気？
リョウタ もう・・・逃げない。

リンカ いいじゃん、明日はどんかつ弁当、教室でみんなと一緒に食べれるよ。
リョウタ ああ、そうか・・・。久しぶりだなあ。

リンカ もう私はお兄ちゃんには必要ないね。
リョウタ そんなことはない！そんなことは・・・。

リンカ 私だってさあ、お兄ちゃんの逃げる口実にされてさあ、あきらめる理由にされてさあ、なんか、ちょっともやもやしてたんだよねえ。もう、すっきりきっぱり死なせてよ・・・っていうか、もう死んでるんだけれども。

リョウタ うん・・・
リンカ 信じてるよ。お兄ちゃんが私の事を忘れないって。だから、もういいよ。
リョウタ うん。

リンカ (遮る様に、強く) お兄様！私はそろそろ次のフェーズへと移行せねばなりません。
せん。

沈黙。

リョウタ そうか・・・
リンカ もう私はお兄様には必要ない故。

リョウタ ならば、お前が眠るための漆黒の闇を贈ろう。
リンカ ありがたきシアワセ。

リョウタ 静かな、安らかな、あたたかな暗闇を贈ろう。
リンカ 身に余る光栄。

リョウタ 光も、音も、終焉も再生もない広い広い宇宙を贈ろう
リンカ すばらしき賜物

リョウタ (次第に涙声になる) そこで眠るがいい。永い永い、安寧の時間を、そこでむさぼるがいい。誰も、もうそなたを起こすことはない。誰も……俺も……

リンカ なんとという慈悲。
リョウタ ……ダメだ、この2年間でだいぶ慣れたとはいえ、厨二病のボキヤブラリーは相変わらず貧困だ。

リンカ そんなことないよ。お兄ちゃん。私の趣味に付き合ってくれてありがとう。まったく、中学2年で死んだ、厨二病ごっこ大好きのヲタク少女とか、口にするに死ぬほど恥ずかしいね……あ、何度も言うけど、死んでるんだけど。

リョウタ うん。

リンカ さよなら。

リョウタ うん。

リンカ さよなら。

リョウタ うん。

リンカ さよなら。

リョウタ うん。

リンカ 逃げてもいいから……逃げるな。

リョウタ うん。

リンカ ……がんばれよ。

リョウタ おう。

リンカ 泣くな。

リョウタ おう。

リンカ、去る。

リョウタ、うつむく。泣いているのかもしれない。

音楽。

【世界が、展開する⑨】

①数日後 学校の廊下 昼休み

ユイが廊下を歩いている。

後ろから、ミサキとメグロがやってくる。

メグロ ユイちゃん。単元テストどうだった？

ユイ あー、まあまあかな。

メグロ 私全然ダメ。絶望的。

ミサキ (ユイに) ねえねえ、今日一緒にお昼食だよ。

ユイ うん。

メグロ うち、今日お母さんが寝坊して、おかず超少ない弁当。最悪。

ユイ そんなこと言うな。感謝しなさい。
メグロ まあ、うん。
ミサキ 私、ジュース買ってくる。ちょっと待ってて。
メグロ あ、私もお茶。

二人が出ていったのと反対方向から、リンカ。

ユイ あ・・・

リンカ お弁当、楽しみだね。

ユイ あ、はい。

リンカ ありがとう。

ユイ え？

リンカ、ユイをハグする。

メグロ (戻ってくる) 馬鹿だー、教室に財布忘れたー。

ユイがメグロの方に気を取られている間に、リンカはいなくなる。

ユイ あれ？

メグロ なに？どうかした？

ミサキが出てくる。

ミサキ (ジュースを手に) お待たせ〜。おなかすいた〜。

メグロ よっしゃあ、ランチだ。ランチ！

ユイ うん。

3人教室へ行こうとする。

そこにリョウタが通りかかる。

軽く挨拶をして、すれ違うリョウタとユイたち。

ユイとリョウタだけが立ち止まり、振り向く。

リョウタがパンが入っている袋を持ち上げて見せる。

ユイが、微笑む。

幕が下りる。